
本命な板チョコ

-SKY-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本命な板チョコ

【Nコード】

N9323G

【作者名】

- SKY -

【あらすじ】

渡す勇気なんてないくせに、それでも律儀にチョコを用意する。馬鹿みたいだけど。でも、そんなことくらいしか出来なくて。――ずっとすきだった人に板チョコを渡す。一日遅れのバレンタイン物語

「はい、コレ。」

そう言っただけ出したのは、さっき買ったばかりの板チョコ。

「今日のお礼。送ってもらった上に、買い物まで付き合ってもらったから。」

昨日はバレンタインだったから、お礼はやっぱりチョコがいいだろうと思うて。

牛乳やパンと一緒に、買い物カゴに入れておいたんだ。

「ああ、…ありがとう。」

そう言っただけ受取る大樹の笑顔に、思わず見惚れてしまう。

自分でも驚くくらい、あたし今こんなに大樹のこと好きなんだなあ。

昨日渡せなかった手作りチョコを思うと、ちょっと哀しくなるけど。

それでも今日は、本当いい日。

今日は、朝から大学に行かなきゃいけないくて。

用が終わって帰ろうとしてるところで、大樹に会った。

話してる途中で急に雨が降り出して。

傘ないんだよねって呟いたら、じゃあ車で送ろうかって言ってくれた。

学校まで乗ってきた自転車があつたし、急げばそんなに濡れないだろうとは思ったけど。

それでも、せっかくの大樹からのお誘い。
断るなんてもったいないこと、あたしには出来なかった。

二人で歩いた、駐車場までの三分間。

大樹の傘に入れてもらって。

大樹は、あたしが濡れないよう気遣ってくれたみたいで。
左肩が少し濡れてた。

初めて乗る、大樹の助手席。

でも、普通に行けば五分で家に着いてしまう。

それが嫌で、「そういえば買い物しなきゃいけなかったんだよね」
ってちよつとわがまま言ったら。

「じゃあ、スーパー寄ろうか？」って言うてくれた。

隣に並んで買い物していると、何か恋人同士みたいで。

周りからどう思われてるんだろうって、ドキドキしてた。

そんな感じで買い物も終わって、今はアパートの駐車場に着いた
とこ。

別れ際にお礼のチョコを渡して、それで終わるはずだった。

けど、板チョコ一枚でこんなに嬉しそうな顔してる大樹を見たら
…。

卑怯だよな。

こんな笑顔見せられたら、期待してしまう。

昨日のチョコあげてたら、どんな顔してたんだろうって。
本当のこと、言いたくなってくる。

「本当はね、大樹用に作ってたんだよ、チョコ。」

サークル仲間に配る義理チョコとは、別にどうせ渡せないからって思ってたんだけど。

「渡す渡さないは別として、一応作つていたら？」なんて沙希が言うから。

「え、ホントに？」

大樹は愛想笑いとかは下手だけど、嬉しいときは本当に嬉しそうに笑う。

今みたいに。

普段クールなくせにね。

けど、そんな所がすき。

そう思うと、あたしの頬も自然に緩んできた。

「うん。」

「へえ…。」

こうやって口元に手をあてて笑うのは、照れたときの大樹の癖。

大樹は気付かれてないつもりかもしれないけど、あたしはちゃんと知ってる。

「…もう、ないけどね。」

「ん？」

「昨日、自分で食べちゃった。」

「え、何で？」

「……渡せなかったから。」

「ああ、…昨日会わなかったから？」

何も食えることないのにつて感じて呟く大樹。

あたしからチョコ貰えなかったこと、そんなに残念に思ってくれるんだ？

でも、貰えるチョコが一個減ったからそう思ってるだけかもしれない。

もしそうなら、こんなに哀しいことはない。

あたしのこの想いを、どうでもいいような人の義理チョコと一緒にしないで。

「だって、……義理じゃないんだよ？それでも、貰ってくれてた？」

あたしの震える声を聞いて、大樹にも伝わったみたいだった。昨日の夜、あたしがどんな想いで一人チョコを食べてたのか。

戸惑う大樹。

返事を貰うまでのこの瞬間が、すごく嫌い。

もっと、嬉しそうな顔してくれるかと思った。

すきだったのは、意識してたのは、あたしだけだったんだ。馬鹿みたい。

何であんなこと言っちゃったんだろ。

逃げ出したくなる。

「じゅめん。今の忘れて。」

聞こえるか聞こえないか。

そんなくらしいの声だけ残して、あたしは助手席のドアを開けた。

「あつ、広瀬。」

呼び止められて、仕方なく止まる。

本当はもう、これ以上ここに居たくなかった。

今の顔は見せたくない。

緊張とか不安とか後悔とか、色んな負の感情を混ぜたような、きつとそんな顔してる。

だから、大樹の方は向かない。

助手席の窓から、振り続ける雨を眺めながら。

大樹の次の言葉を背中ですわった。

「広瀬……。」

大樹の方に体を向けながらも、あたしは俯いたままだった。

今、大樹の顔なんかまともに見れない。

「……貰ってたよ、チョコ。義理じゃなくても、」

「え？」

視線を大樹に戻すと、そこには少し赤くなった大樹の顔があった。

「俺もずっと前から…、広瀬のことすきだった。」

それから、あたしの部屋でさっきの板チョコを食べた。
もちろん大樹と一緒に。

コーヒーを飲みながら、大樹は言った。

「来年は手作りのがいいな。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9323g/>

本命な板チョコ

2010年12月11日01時18分発行